学園黙示録 HIGHSCHOOL OF THE DEAD -全てはキミを護るため-

楓 夏樹

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
学園黙示録　ＨＩＧＨＳＣＨＯＯＬ　ＯＦ　ＴＨＥ　ＤＥＡＤ
－全てはキミを護るため－

【Ｎコード】
Ｎ４７０４Ｐ

【作者名】
楓　夏樹

【あらすじ】
ある日、彼は小さな子どもを護るために命を落とした。
しかし、死んだはずの彼の目の前に自分を“神”と名乗る男が現れ、転生しろという。
転生した彼が来た世界は、“地獄”だった。
学園黙示録　ＨＩＧＨＳＣＨＯＯＬ　ＯＦ　ＴＨＥ　ＤＥＡＤ　の

二次創作作品です。
まだまだ未熟な文才ですが、皆様に読んで頂ける様な小説にするために精一杯頑張っていきたいと思います。

―Ｐｒｏｌｏｇｕｅ―（前書き）

この度は、この小説を読んでいただきありがとうございます。
この小説は、原作・アニメ・オリジナルストーリーを織り交ぜて進んでいく物語です。
そういうのが苦手な方は、あまりオススメできません。

一応、主人公＝超絶チート君というわけではありません。（まぁ、一般人よりは数段強いですが・・・。）

因みに、メインヒロインは毒島冴子さんです。

では、どうぞ＾＾

―Prologue―

目を覚ますとそこは何もない真っ白な世界だった。

「ここは・・・・。どうして俺はここにいるんだ・・・・？」

上下左右がハッキリしない。
自分は立っているのか浮いているのかさえもわからない。
ただ俺は“そこ”にいた。

「よぅ、ヒューマン。」

いきなり背後から声が聞こえてきた。
身体を捻り何とか後ろを向くと、そこには一人の男が立っていた。
白装束を身に纏い、何もない空間で胡坐をかき膝を肘置き代わりにしながら俺を見つめていた。

「アナタは？」

「俺か？俺はテメェらの言うところの“神”ってやつだ。」

自称“神”男はそう言って、不適な笑みを浮かべた。

「・・・・。じゃあ神様、ここはどこですか？」

「お？案外スンナリ信じちまったな。もっと疑ったり怪しんだりしねぇのか？」

「俺は、神という存在を見たことがないので、アナタが神なのかそ

うではないのかを見分けることが出来ません。だから、アナタが神ではないとは言い切れないので、とりあえずは信じることにしました。まぁ、百パーセント信じているわけではありませんが。」

「ふーん。」

「それに、アナタからは何となく人とは違う感じがしたので。」

「・・・・・今回は、なかなか面白い奴が来たな。」

そう言って、不敵な笑みを浮かべる自称“神”。

「それで、ここはどこなんですか？」

「ここは、“黄泉”だ。」

「・・・・ということは、俺は死んだってことですか？」

「察しが良くて助かるぜ。そう、お前は子どもを助けて死んだんだ。」

そうか・・・。俺は、死んだのか・・・。

そう考えた途端に少しずつ思い出してきた。

そうだ。俺はバイトからの帰り道で、横断歩道を渡っていた女の子を信号を無視して突っ込んできたトラックから助けるために道路に飛び込み、そして、死んだんだ。

「どうやら、思い出したみたいだな。」

「はい・・・。」

「ってことでお前、転生しろ。」

「・・・・・は？」

何を言い出すんだこの人は・・・。

「何故・・・です？」

「いやな、俺もう数え切れないくらい生きてるんだけどよ。なんかつまんなくてな。だから、１０億人目に善行をして死んだ奴を転生させてソイツの人生を観察して暇つぶしにしようじゃねぇかと思ってな。」

「・・・つまり、その１０億人目が俺というわけですか？」

「ご明察。」

流石神というか、なんというか、無茶苦茶だ。
俺にはこの行為自体が良い事なのか悪いことなのかは、わからない。
だけど、何というか少し軽すぎないか？と思うのは俺だけではないはずだ。

でも、正直それでまた生きていけるならいいかもしれない。

「・・・わかりました。」

「ははは っ。適応能力が高い奴は好きだぜ、俺は。」

適応能力というか、半分もうどうにでもなれって感じが否めないん

だけども、まぁいいだろう。

「つーわけで、お前を転生させる代わりに、お前の願いを3つだけ叶えてやる。」

「願い・・・ですか？」

「そうだ。何でもいいぞ？たとえば、巨万の富が欲しいでも、世界征服したいでも、誰にも負けない最強の力が欲しいでもな。」

「3つの・・・願い・・・。」

3つかぁ。

特に何も願いは思いつかないなぁ。

んー・・・。

あ、そうだ。

「じゃあ、まず一つ目の願いいいですか？」

「おう。ドンと来い。」

「今まで俺が生きてきた世界から“俺”という存在を消してください。」

「・・・・は？」

自称“神”は、何言ってるんだ？みたいな顔をしながら俺を見つめている。まぁ、そんな顔になるとは思っていたけどさ。

「俺が死ねば俺の家族や友達が悲しむじゃないですか。だったら、

“俺”という存在が消えれば誰も悲しませなくて済みますから。」

「・・・だが、それではお前を覚えている奴が居なくなっちまう。誰もお前の死を弔ってくれる奴はいなくなる。それでも、いいのか？」

「・・・正直、少し淋しいですけど、俺はみんなを悲しませたくないんです。」

「・・・・・。」

しばらく自称“神”・・・。もう神でいいか。神の顔から笑みが消え、真剣な顔をして俺の眼を真っ直ぐに見つめてきた。
その眼差しは俺の意思の固さを計っているように思えた。

「・・・はぁ、わかった。引き受けよう。」

しばらく、見つめた後に神は深い溜息を吐きながら、頭をガリガリと掻き始めた。

「ホントに変わった野郎だな。」

「ははははっ。よく言われます。」

「んで、次は？」

「じゃあ、俺の家族や友達が幸せに暮らせるようにしてください。」

「・・・前言撤回。喜べ、お前はたった今、今世紀最大のお人好しに格上げだ。」

「ははは・・・。」

「さぁ、お人好し。最後の願いだ。」

「んー・・・・じゃあ・・・。もし、俺に大切な人が出来たらその時はその人を護れるような力が欲しいです。」

「・・・・最後まで、自分じゃない他人のための願いだったな。欲の無ぇ野郎だ。・・・わかった。お前の願いを叶えてやる。」

「ありがとうございます。」

「さぁ、そろそろ逝ってこいや。」

何だろう、若干いってこいのニュアンスが違うような気がしたが気にしたら負けなのだろう。

「それで、俺はどんな世界に行くんですか？」

「知らん。」

・・・・。

「何だろう、だんだんこの適当さに慣れてきている自分が怖い。」

「だって、その方がおもしれぇだろ？」

「はぁ・・・。」

「んじゃあ、達者で暮らせや。お前の人生にそれなりの加護があるように祈っておくように頼んでおくぜ。じゃあな。」

そこは、アナタに祈ってもらいたかったです。

そんなことを思いながら、俺の意識は闇の中に沈んでいった。

―Prologue―（後書き）

う～ん。セリフばかりだ・・・＞＜
誰か俺に文才を分けてください；；

これからしばらく、オリジナルストーリーが続きます。

―Second Life―（前書き）

更新は不定期ですが、あまり間を空けないように頑張りたいので、
よろしくお願いします。

―Second Life―

俺は突然の浮遊感に目を覚ました。
しかし、周りが眩しすぎてに目が開かない。
すると、今度は身体を上下に揺らされはじめ、それと一緒に女性の鼻歌が聞こえてきた。まるで、子守唄のような優しいメロディーの鼻歌だった。

「（これは・・・抱きかかえられているのか？）」

徐々に光に慣れてきたのか、周りの景色がハッキリと見えるようになってきた。
多分ここは病院の病室なのだろう。消毒液のようなにおいが微かにするからほぼ間違いない。
それにしても、身体が思うように動かない。しかも身体が赤ん坊のように小さい。
どうやら、転生したことによって赤ん坊に変わってしまったようだ。
それにしても、ここはどんな世界なのだろう・・・。
転生先は神が適当に決めたみたいだし、少し不安だな・・・。
それよりも、本当に俺は転生したのだろうか・・・。あまり実感がわいてこない。まさか、夢落ちなんてことはないだろうな・・・。

「あら、目が覚めた？」

すると、上の方から声が聞こえてきた。
顔を上げ見えてきたのは満面の笑みを浮かべた女性の顔だった。茶色の髪をセミロングにした綺麗な女性だった。

「悠(ゆう)君、私がママですよー。わかるかなぁ？」

「（あぁ、そうか。俺は本当に転生したのか・・・。そして、この人が俺の母親・・・。何だか複雑な感じだな・・・。）」

どうやら、あの神の言っていたことは本当のようだ。
そして、俺の名前は「悠」というらしい。
チラッと母さんの後ろを見ると、壁に貼ってあるプレートに“高瀬(たかせ)結(ゆい)”と書かれていた。これが、母さんの名前か。しっかり覚えておこう。

「それにしても、君はあまり泣かないのねぇ。こんな泣かない子初めて見たわ。お利口さんなのね。」

そう言って、母さんは俺の頭を撫でた。

コンコンッ

すると、ノックの音が聞こえてきた。

「はい、どうぞ。」

母さんの返答を受けて病室の扉が開かれた。

「目を覚ましたのかい？」

入ってきたのは、銀縁のメガネをかけた優しそうな顔をした男性だった。

「えぇ、ついさっき。聡さんも抱いてみる？」

恐らくこの人が俺の父さんなのだろう。

「ちょっと緊張するな。」

そう言いながら、少しぎこちない手つきで、俺を抱き上げた。

そして、俺の顔を見た父さんはとてもうれしそうな笑顔を浮かべた。

「これからよろしくね、悠。」

ここから、俺の第二の人生が始まった。

◆

アレから六年の月日が流れた。
俺は幼稚園を卒業し、来年から小学生だ。
正直、俺としては二度目の小学校生活なわけで、あまり喜べないでいる。
まぁ、そんな俺の愚痴はさておいて。
この頃から俺は武術と剣術の修練を始めた。

何故そうなったかというと、実は驚いたことに俺の両親は武術道場をやっていて、剣術部門の師範代を母さんが、格闘技部門の師範代を父さんがやっていたのだ。
何という最強夫婦。
まぁ、そんなわけで俺もこの二人に武術を習うことになったわけだ。
剣術は母さんの家系に伝わる剣術“高瀬流護剣術”という人を護るための剣術を。
格闘技は中国拳法を中心に様々な格闘技を教わることになった。
あと、精神鍛錬の一環として、『氣』というものも教わった。
これは、生命の源である大気を呼吸をすることによって体内に取り込み、それを様々な力に変換する技術らしい。
前世で見たマンガでも、こんなことかいてあったな・・・。なんて思いながら、父さんと母さんの説明を聞いていた。

それから毎日、俺は両親に稽古をつけてもらっていた。
時代のせいなのかこの道場には門下生みたいな人もいなく、ほとんどマンツーマン状態だ。
筋トレから始まり、様々な型を覚えたり武術を習得するにあたっての心構えなども教わった。
型を覚えるときには、母さんや父さんが見本を見せてくれるわけだが、正直、この二人の実力は凄い・・・・と思う。
武術に関して全くの無知である俺だが、それでもこの二人の動きや

雰囲気は他の人とは違う何かを感じるほどだ。

“この二人に教われば、俺は強くなれる。”

前世で、人並みもしくはそれ以下の力しかなく、子どもの頃からこんなマンガやアニメに出てくるヒーローのような“ヒロインを悪から護れるような強さ”に憧れていた俺は純粋にそう思った。

そして、同時に“必ず強くなってみせる。”そう心に決めた瞬間だった。

◆

再び時は流れて、俺は小学五年生になった。

見た目は子どもでも中身は二十歳過ぎのため、学校の授業は簡単だった。まぁ逆に簡単にできないとダメなわけだが。そんな感じで結構楽しく二度目の小学生生活を過ごし、友達も結構できた。

それと同時にあれから五年、毎日両親からの修練を受けていた俺は、その頃には剣術・格闘技ともに同年代には負けないような実力を身につけていた。

そんなある休日のこと。

その日もいつもと同じように両親に稽古付けてもらっていた。

ピンポーン

「ん？誰か来たみたい。私出てくるわね。」

そういって、母さんは道場を出て行った。

しばらくすると、遠くから母さんと母さんとは別の女性の声が聞こえてきた。

そして、母さんが戻ってくると、母さんと一緒に見たことがない女性と俺と同じくらいの女の子が入ってきた。

「聡さん、早苗さんが遊びに来てくれたわよ。」

どうやら、この人は早苗さんというらしい。

「おぉ。お久しぶりです、早苗さん。」

そして、父さん達の知り合いらしい。

「悠。この人は毒島（ぶすじま）　早苗（さなえ）さん。母さんのお友達だよ。そして、一緒に隣に居るのが早苗さんの娘さんで、お前と同い年の冴子ちゃんだ。」

へぇ、この子冴子ちゃんっていうのか。・・・・・ん？毒島　冴子・・・？どっかで聞いたことのあるような・・・・。まぁ、いいか。

「初めまして、高瀬　悠です。」

「初めまして。礼儀正しいとってもいい子ですね。私のことは早苗って呼んでください。」

そう言って、早苗さんはニコリと笑った。
すると、隣に立っていた冴子ちゃんが一歩前に出てきた。

「初めまして、毒島　冴子です。」

そう言って、冴子ちゃんは挨拶の後にペコリと頭を下げた。
紫陽花のような紫色の髪をショートカットにしていて、少し切れ長の目と俺と同じ小学五年生の女の子のはずなのに、どこか大人びた凛とした雰囲気を持ったとても不思議な子だった。

「それにしても、今日はどうしたの？」

「えぇ、実は主人の仕事の都合で、この近くに引っ越すことになったのでそのご挨拶に来たんです。」

「あら、本当に？じゃあこれからはいっぱい会えるのね。」

「はい。それと、良ければこの子をこの道場に入門させてほしいんです。」

「冴子ちゃんをここに？」

「えぇ。今まで通っていた道場にはもう通えないので。それに、結さんと聡さんの道場なら安心ですし。ダメでしょうか？」

「大歓迎よ。ね、聡さん？」

「あぁ、勿論さ。」

「ありがとうございます。これから、よろしくお願いしますね。」

どうやら、冴子ちゃんもこの道場に通うことになったらしい。
今までずっと一人しか居なかったから、ちょっとうれしいな。
なら、改めて挨拶しておかないと。

「これからよろしくね。毒島さん。」

そして、俺は冴子ちゃんに手を差し出した。

「こちらこそよろしく。それと、私のことは冴子って呼んで。私も君のこと悠君って呼ぶから。」

そう言って冴子ちゃんは俺の手を握った。

「うん。わかったよ冴子ちゃん。」

これが、俺と冴子ちゃんの出会いだった。

―Second Life―（後書き）

転生から一気に小五まで進んでしまいました><

あんまり詳しく書きすぎると原作までの話が長すぎると思った結果、このような形になりましたけど、今ではもう少し詳しく書けば良かったかな？なんて思ったりしています^^；

それはそうと、ついにこの物語のメインヒロインである冴子さんが登場しました^^

どんな登場の仕方がいいか考えた結果、ちょっと更新に時間がかかってしまいました><すみません；；

今度からはあんまり間を空けないようにがんばります^^

さてさて、次回は冴子さんのトラウマである“アノ”出来事のお話です。

冴子さんは、原作通りトラウマを抱えたまま生きていくことになってしまうのか？

そして悠はどのような行動をするのか？

次回に続きます。

―Ｔｒａｕｍａ―（前書き）

大変お待たせいたしました＞＜；
いやはや、やっぱり年末は忙しいですね；；；

早速、物語を始めましょうか＾＾
今回のお話は冴子さんの“アノ”事件のお話です。
ここは、オリジナルストーリーで進んでいきます。

では、どうぞ。

―Trauma―

冴子がうちの道場に来てから四年が経った。
あれから俺たちは毎日の稽古を通してかなり親しくなり、学校帰りは毎日一緒に帰るほどになった。
それは、中学校になっても変わらず、俺と冴子は同じ中学に入学し、同じクラスになり、部活も同じ剣道部に入部した。
元々前にいた街でも剣道道場に通っていた冴子は、日々父さん達の稽古を受けた事によって直ぐに女子剣道部のエースになり、俺も男子剣道部のエースになった。

毎日が楽しかった。
家では毎日一緒に稽古を受け、部活では毎日何度も竹刀を打ち合った。
学校では、一緒にお弁当を食べたり、休日には二人で出掛けたりもした。
毎日が幸せだった。
そんな毎日を送っていた俺が冴子を好きになるのに、そう時間は掛からなかった。

そんなある日のことだ。
その日俺は委員会で遅くなり別々に帰っていた。
その帰り道に、冴子が不審者に襲われた。

幸い冴子は持っていた木刀でその不審者を撃退したため、大事には至らなかった。
正直、冴子を襲った男に対しての怒りと、待ってもらってでも一緒に帰ればよかったという後悔が残ったが、一先ず冴子が無事だったことを喜ぶことにした。
しかし、それから冴子の様子が少し変わった。それも、周りからは気づかれないくらいの微かな変化だった。
普段はいつもと変わらないが授業中や一人で居るとき酷く考え込むようになり、部活でもいつものような堂々とした雰囲気はなく、まるで何かを忘れ去りたいかのようにただがむしゃらに打ち込んでいた。
そして、次第に俺との試合の数が少なくなり、終いには俺を避けるようになった。
俺は最初、あの事件のことを忘れるためかと思っていた。しかし、なんとなく違う。そんな気がした。
だけど、冴子が何かを抱えているのは明らかだった。
だから、俺は家での稽古が終わり、互いに汗を流した後に冴子を道場に呼び出した。

「どうしたのだ、悠。私に何か用か？」

「冴子。お前、何か悩みがあるんじゃないか？」

「・・・・別に、悩みなどない。」

冴子は視線を逸らした。明らかに何かを隠している。

「嘘だ。」

「嘘じゃない。」

「嘘だ。」

「嘘じゃない。」

「じゃあ、何故俺を避ける？何故、あんな思い詰めたような顔をしていた？」

「それは・・・・。」

「俺は、そんなに頼りないのか？冴子の中で俺の存在はそんなに小さかったのか？」

「そんなことないっ！！」

「じゃあ、何故だ？」

「・・・・・・・・。」

軽く震えながら俯く冴子。
俺はただ待つことにした。
話すか話さないかは、冴子が選ぶことだ。もし、話さないを選んだとしてもそれは俺が不甲斐ないだけで、冴子には何の非もないのだから。

「・・・・怖かったのだ。」

しばらくの沈黙の後、消え入りそうな小さな声で呟いた。

「打ち明けた時、悠が私から離れてしまうのがたまらなく怖かったのだ・・・・。」

「心配するな。例えどんな事があっても、俺はお前から離れることはない。」

「・・・・ありがとう、悠。」

そう言って、冴子はゆっくりと話し出した。

「私が男に襲われた時の事だ。私は羽交い絞めにされ、壁に押さえつけられた。」

やはり、あの事件関係のことだったのか・・・・。

「しかし、私は持っていた木刀で男の隙をつき、大腿骨と肩甲骨を叩き割ってやった。事情を聞いた警察は、私を家まで送ってくれたよ。」

「確かに、過剰防衛かもしれないがそんなもの気にすることはない。

悪いのはアイツだ。」

「私はその事事態に思い悩んでいるわけではない。」

そう言って冴子は顔を上げた。その時の冴子の目は今でも忘れられない。
不安と恐怖と悲しみ、様々な負の感情が渦巻く瞳をしていた。

「楽しかったのだ。明確な敵を得られたこと。それは悦楽そのものだった。
その時、木刀を手にした自分が圧倒的優位に立っていると知った私は、怯えた振りをして男の動きを誘い、躊躇うことなく逆襲した。
楽しかった。本当に楽しくてたまらなかった。
それが、真実の私。毒島冴子の本質なのだ！！」

「冴子・・・。」

破壊衝動と似たようなものだろうか。
こんな想いを抱いていたとは、考えつかなかった。
これは、そう易々と打ち明けられるようなものではない。
相当な傷を負ってきたに違いない。
だったら、俺に出来るのはこれしかない。
俺は、壁にかけてあった木刀を二本掴み、一本を冴子にを投げた。

「？」

困惑顔で木刀を受け取る冴子。

「試合をしよう。」

「な・・・何を・・・？」

「一本先取だ。いいな。いくぞっ！！」

「っ！？」

一気に間合いを詰め振り下ろした一閃を冴子は咄嗟に受けた。

「はぁぁっ！！」

一旦後ろに引き、姿勢を低くして胴を目掛けて一閃。
冴子はそれを横にかわした。

「はあああっっ！！」

困惑していた冴子だったが、俺の攻撃が冗談ではなく本気とわかり
気持ちを切り替え、俺にカウンターを入れる。
そのカウンターを前転でかわし、素早く立ち上がってもう一度一気

に間合いを詰め木刀を振り下ろす。
冴子はそれを真正面から受け、鍔迫り合いになる。

「はっっ！！」

数秒の均衡を破ったのは冴子だった。
力を込め、俺の木刀を弾く。

「はぁっっ！！」

そして、がら空きになった俺の胴に払い斬りを放つ。
これは、最早勝負が決まる瞬間だった。

普通ならば。

「甘いっっ！！」

「なっっ！？」

この攻撃を待っていた。
俺は、持っていた木刀を捨て、腰を下ろし左腕を下げ冴子の一閃を受け止めた。
父さんに習ってきた氣を腕に込め、肉体を強化する『硬気功』を使ったのだ。
まぁ、だからといってこの硬気功は多少身体を強化するだけで、実際は少し痛いわけだが、今はそんなの関係ない。
そのまま腕を木刀に滑らせたまま、間合いに入り込む。
冴子も咄嗟に俺に向け膝蹴りを放つ。
それを左手で防ぎ、右掌手を腹に放つ。

「くっ！！」

少し顔をしかめながら若干顔を歪める冴子。
しかし、まだ終わらない。
さらに、俺は払い斬りの体勢で伸びていた腕を掴み、その場で身体を反転させ一本背負いを放った。
体勢が崩れていた冴子の身体は簡単に半円を描きながら床に落ちた。

「っつぅ！！」

何とか受身を取った冴子だが、衝撃によって動きが止まった。
その瞬間を見逃さずに俺は冴子の顔の寸前に拳を突きつけた。

「・・・・・・私の負けだ。」

勝負は決まった。

「ふぅ・・・。立てるか？」

「あぁ・・・大丈夫だ。」

俺の手を取り立ち上がる冴子。

「・・・・悠？」

しかし、俺は立ち上がってもその手を離さなかった。

「気にするな。」

「え？」

「冴子は何もおかしくなんかない。ちょっと、人より勝つ事が好き。ただ、それだけだ。」

「そんなの・・・・。」

「まぁ、どうしても我慢できなくなった時は・・・俺が全部受け止めてやるよ。」

「悠・・・・。」

負の感情に満ちていた瞳は光を取り戻し、目尻に涙が溜まっていく。

「何故・・・。」

「ん？」

「何故、私にそこまでしてくれるのだ？」

おいおい、言わないとわからないのかよ。

「そんなの冴子が好きだからに決まってるだろ。」

「え？・・・・・。私が・・・・・好き・・・・・？こんな私が？」

「関係ないよ。俺は冴子のすべてが好きなんだ。優しい冴子も、怒った冴子も、勝つ事が好きな冴子も、笑顔が可愛い冴子も。全部好きなんだ。」

「ゆ・・・・う・・・・。」

冴子の瞳に溜めていた涙が一気に流れ始めた。

「私も・・・・・悠が・・・・・・好きだ。」

そう言って、冴子が俺の胸に飛び込んできた。

「うれしいよ。ありがとう。」

その冴子を俺は優しく抱きしめた。
そして、俺は誓った。

今後何が起きようとも、“冴子は俺が護る。”

この日俺は冴子というかけがえのないもの手に入れた。

―Ｔｒａｕｍａ―（後書き）

慣れない戦闘シーンはやたら疲れました＞＜；
でも、少しやり切った感を勝手に感じている作者ですｗｗｗ

次回はいよいよ藤見高校に入学します。やっとのこと原作にたどり着きました；；
では、また次回（ ―皿・）ノ

―An Ordeal―（前書き）

前の章を少し訂正しました。
勝負が好き→勝つ事が好き。
何故勝負と書いたのか自分でもわかりません＞＜；
失礼しました。

今回は遂に藤美学園に入学するところまでのお話です。
では、どうぞ（〃（ ｜（ ））／

―An Ordeal―

どさくさにまぎれて、告白した結果は大成功に終わり、幸せ気分に浸っていたいわけだが、そうもいかないみたいだ。
何故なら今、俺の横でその愛しい人が横で寝ているからだ。
一体ぜんたい何がどうしてこんな状況になってるんだろうか？
理由を聞いてみると

「好きな男（おのこ）と一緒にいたいと思うのは、当然のことであろう？」

と、満面の笑みを浮かべながら言われたら何も言えなくなってしまった。
そんな感じでさっきからずっと冴子は俺のベットに入り込み、俺に抱きついている。
正直、まだ中学生とはいえ冴子の身体はまぁ・・・なかなかな感じなわけで、俺も肉体的には中学生だけど中身は・・・・なわけだから、理性が持つか少し不安です。

「そういえば、悠。」

「ん？」

「さっきは何で突然試合するなんて言ったんだ？」

「あぁ。冴子の話聞いて、俺に何が出来るのかを考えた結果、俺に出来るのは冴子の『勝ちたい衝動』を全てぶつけても平気な存在になることしかないと思ってね。だったらそのことを証明するために冴子に勝つ必要があると思って試合をしようって言ったんだ。」

「そうだったのか・・・。世話をかけたな。」

「気にすんな。まぁでも俺の中では最後に『もし、冴子が耐えられなかったときは俺が相手になってやるよ』みたいなことを言ってカッコつけたかったんだけど・・・。」

「だけど?」

「冴子の一撃を受けたところが予想以上に痛くて、カッコつけてる余裕なかった。」

情けない話俺の硬気功はまだ未完成なため、生身とさほどかわりなく、そんな身体で木刀のしかもかなり本気な一撃を受けたらそりゃあ痛いのは当然である。

「大丈夫なのか?」

「大丈夫、大丈夫。それよりも冴子は大丈夫なのか?腹とか背中とか。」

「私は大丈夫だ。悠の手加減のおかげでな。」

そう言って少しいじけたようにそっぽを向く冴子。
確かに俺は手加減をした。掌手も一本背負いも冴子が怪我をしない程度に力を抜いた。
しかし、冴子にとって手加減されたということが悔しいようだ。

「当たり前だろう？好きな人を傷つけるなんて俺は真っ平ごめんだね。」

「むっ。そんなこと言われたら何も言えなくなってしまうではないかっ。」

そう言って顔を少し赤らめながら更に強く抱きついてくる冴子。
そんなたまに見せる可愛い仕草がグっとくる。

「さぁ、そろそろ寝ようぜ。俺はもうクタクタだ。」

「そうだな、そうしよう。では、早速・・・。」

一気に冴子の顔が近づき、俺と冴子の唇が重なった。
全身に甘い刺激が駆け巡る。
突然の出来事に一瞬驚いたが、すぐに刺激に身を任せた。
数秒ののち、互いの唇が離れた。

「・・・・おやすみ、悠。」

頬を紅く染め、少し恥ずかしそうに笑う冴子。

「あぁ、おやすみ、冴子。」

そんな冴子を抱き寄せながら、俺たちは眠りについた。

目を開けると見覚えのある真っ白な世界が広がっていた。

「よう。久しぶりだな。」

前回と同じように後ろから声が聞こえてきた。
無論、神だ。

「お久しぶりです。」

「ずっとお前を見ていたぜ。どうやら、お前の言う『大切な人』とやらを見つけたようだな。」

「えぇ、まぁ。」

「じゃあ、約束通りお前にそいつを護る力を与えてやるよ。」

そう言って、神は俺に右手をかざしてきた。
すると、その手から淡い光が流れ、序々に長い棒のような形に変化していく。
光が消えると一本の刀が宙に浮いていた。

「この刀はお前がそいつを護りたいと思う限り決して折れることはない。それともう一つ。」

今度は左手を俺にかざしてきた。
すると、俺の身体が光だした。
その光は俺の中に入っていくように消えていった。

「お前の身体能力を少し強化しておいた。腕力と動体視力は勿論、氣の効果と質量も今までとは比べ物にならないぜ。」

流石、神。何でもありだ。

「ありがとうございます。」

「気にするな。俺はただ願いを叶えただけだ。」

グットサインを出しながら、歯を見せ笑う神。

「あ、そうだ。あの一つ聞いてもいいですか？」

「ん？何だ？」

「俺の居る世界ってどんな世界なんですか？俺未だにわからないんですが・・・。」

「それは、教えられねぇな。」

「何故？」

「その方が面白いからだ。」

コイツ、明らかに俺の人生で遊んでやがる。

「だが、一つ忠告しておいてやる。」

いきなり真剣な顔をする神。いつも不敵な笑みを浮かべていた神が突然こんな顔をすると、妙に威圧感がある。

「お前のいる世界は、生半可な世界じゃねぇ。それだけは覚悟しておくんだな。」

「・・・・・はい。」

「それと、もう一つ。」

今度は一体どんなことを言われるんだ・・・。

「近々、お前の両親とお前の大切な奴の両親が死ぬ。」

「なっ！？」

予想以上の展開に頭が真っ白になった。

「これは、世界が決めた事柄だ。覆すことは出来ない。そして、この事実を張本人や他の人に教えることも許されない。」

「どうにかならないのかよ！？アンタ神なんだろ！？」

動揺しすぎて言葉遣いに気を使う余裕がなくなってしまった。

「ならない。例え俺でも世界に干渉することは出来ない。そんなことをすれば世界の均衡が崩れ、世界が崩壊する。」

言いようのない絶望とわかっているのにも関らず、何も出来ない苛立ちが俺の心をかき乱していく。

「・・・・・何故それを俺に？」

やっとの思いで出た言葉がこれだ。

「お前が『両親が死ぬ』という『事実』を覆すことはできない。だが、“それを知っている”ことでお前にも出来る事がある。」

「俺に・・・出来ること・・・？」

「お前のように感じるのは何もお前だけじゃないってことだ。そのことをよく考えてみろ。」

「どういう・・・・！？」

そうか。死ぬのは俺の両親だけじゃないんだ。
これは冴子にとってもかなり辛いことだろう。
両親を愛し愛されている冴子のことだ。その時の悲しみは計り知れないだろう。
そんな冴子を支えられるのは俺だけだろう。

「・・・・・ありがとうございます。」

「すまねぇな。俺にはどうしようも出来ねぇんだ。」

そう言って少し辛そうな顔をする神。
冷静に考えてみると神には何の非もないんだ。
もし、俺と冴子の両親の『死』という事実を変えてしまうと、同じ『死』という事実をもつ全ての生物を救わないといけなくなってしまう。
そんなことをすれば、神の言うように世界が壊れてしまう。

「わがまま言ってすみませんでした。」

「気にすんな。」

すると、真っ白な世界が激しく光りだした。

「お、そろそろ時間みたいだな。」

「みたいですね。」

「ってなわけで、これからも俺はお前の人生を観察させてもらうぜ。せいぜい俺を楽しませてくれよ。」

そう言って、また不敵に笑う神。
やはり、この人にはこの表情が一番似合う。

「善処します。」

こうして、世界が光に包まれた。

この夢の一年後、俺の両親と冴子の両親が死んだ。
交通事故だった。
事前にこの事実を知っていてもやはり悲しい。しかし、この事実を知らなかった冴子の悲しみは俺の比ではなかった。
しばらくの間、冴子は悲しみに暮れ泣き続けていた。
俺は悩んだ。俺は冴子に何が出来るのか、何をしてあげればいいのか、そんなことを考えていた。
しかし、やはり冴子は強かった。剣の腕だけではなく精神(ココロ)も。

冴子は、俺が何をするまでもなく両親の死を乗り越え立ち直ったのだ。
だが、冴子とて女の子だ。完璧に立ち直れたわけじゃない。

「お願いだから、私を一人にしないでくれ。私にはもう、悠しかいないのだ。だから、いつまでも私のそばに居てくれ、頼む。」

泣くのを止めた冴子が最初に言ったのはこれだった。
俺は力強く頷き、冴子を抱きしめた。

その後、俺たちは互いを支えあうために一緒に暮らすことにした。
少し淋しい気持ちを抱えながらも、共に協力しあいながら日々を暮らし、そして時は流れ俺たちは高校生になった。

その高校の名前は『私立藤美学園』。

この高校に入学したことが俺たちの今後に大きく関ってくるのを俺たちはまだ知らない・・・・。

―An Ordeal―（後書き）

とても、駆け足な感じで物語が進んでしまいました><

こんな感じでいいのだろうか？と感じながら黙々とキーボードに打ち込んでいく作者であった・・・・。（謎

次回は原作の話になります。

では、また次回ゞ（＝・ω・＝）o

―A Hell On Earth―（前書き）

お待たせしました＾＾

今回は遂に地獄の始まりです。

では、どうぞ（＝゜ω゜）ノ

―A Hell On Earth―

また更に時は流れ、俺たちは高校三年生になった。
入学したのは『私立藤美学園』。クラスもずっと同じだった。
入学当時、この学校の名前を、どこかで聞いたことのあるようなそんな違和感を感じたが、未だにその違和感は拭えていない。

冴子は入学してすぐ剣道部に入部。瞬く間に部内でエースの地位を勝ち取り二年のときは全国大会で優勝する程の実力者になっていた。
そして、その功績が認められ今では剣道部の主将を務めている。

変わって俺は今までずっと絶賛帰宅部で過ごしていた。
理由は、俺の“力”のせいだ。
今の俺は身体能力、筋力、氣の扱い共に普通の大人以上なものになっている。まぁだからといって、車を片手で軽々と持ち上げたり、空を飛んだりなんて事は出来ないわけだが。
それを差し引いても高校生相手ならば楽に勝てる。
しかし、この“力”はそもそも冴子を護るために神からもらった力だ。
それをその事以外で使いたくないし、手加減して戦ってもそれは本気で向かってきている相手に対して失礼にあたる。
だから、俺は剣道部に入らなかった。

案の定、その事について冴子に追及された。
別に隠したい訳ではないが、何となく言わないでおきたかった俺は最初、冴子の追及を何とか誤魔化してきた。

しかし、俺の解答に納得がいかなかった冴子は、「理由を言ってく

れなければ、別れる。」なんていう爆弾を落としてきた。
冴子がこんな冗談を言うわけもなく、加えてそう言った冴子が涙目になっていたことに俺は凄まじい罪悪感と後悔の念を抱いていた。

「私は、悠と別れたくない。私にはもう君しか居ないのだ。そんな君に別れを告げるのはとても苦しい。しかし、君に隠し事をされる方が、君に信用されない事の方が私にとって、とても辛い事なのだ。だから、頼む。」

冴子の涙を見て、冴子が今までどれだけ苦しんできたのかを知った。
だから俺は、全てを話す決意をした。
転生のこと。神からもらった力のこと。そして、その理由を。
最初、信じられないという表情をしていた冴子だったが、しばらく考えこむと顔を上げ、

「正直、俄かに信じられないことだが、悠がそう言うのならそれが真実なのであろう。私は君を信じるよ。」

と笑顔で答えてくれた。
今まで冴子に隠し事をしてきたことに罪悪感を感じていた俺にとって、冴子の『信じる』という言葉は胸に溜まっていたモヤモヤを晴らすのには十分すぎるほどの効果があった。
この時、俺は冴子に隠し事はしないと誓った。

そして、後日。「今まで私に隠し事をしていた罰だ。」ということで、部活終了後俺が冴子の相手をする事になった。防具を付けず、そして互いに本気という実戦に近い試合だ。

部活終了後に行われる剣道部最強の冴子と、いつも冴子のそばくっつき、無名の帰宅部の謎の男が互角というより冴子が押し続ける試合は、部員の中で有名になり今では他の部の人だけでなく顧問の教師ですら観戦にくる程になった。

冴子とは常に一緒だった。

登校する時も歩いて四十分くらいかかる距離を毎日他愛もない話をしながら歩き、昼食は冴子お手製の弁当を屋上で一緒に食べ、部活では道場の片隅で冴子の竹刀を振る姿を眺め、終了後は冴子との試合をし、一緒に家に帰り、一緒に晩御飯を食べ、一緒に寝る。

俺の隣には冴子が居た。

とても、幸せな日々。

「こんな日々がいつまでも続けばいいな。」

そう思っていたんだ。

目を開くと見慣れた真っ白な世界にいた。
俺はすぐに後ろを振り向いた。
案の定そこには神がいた。
しかし、少し様子がおかしい。

「・・・・・どうしたんですか？」

「・・・・・気をつけろ。」

「はい？」

「俺のやった刀は近くにあるのか？」

「え・・・えぇ、うちの道場においてありますけど・・・・。」

「じゃあ、それを常に持ち歩いておけ。」

俺はわけもわからずにただ頷くことしかできなかった。

「いいか。現実から目を背けるな。お前の目の前で起きている事は全て現実だ。それを忘れるな。」

「・・・一体、何を言って・・・。」

「何があっても、お前の大切な人を護るんだ。俺に言えるのはそれしかない。」

訳もわからないまま、視界が光に包まれた。

「・・・・・んむ？」

次に目を覚まして最初に見えたのは、目を閉じた冴子のドアップ顔だった。
それと同時に妙な息苦しさを感じた。
まぁ、その理由も既にわかっているんだけども・・・。

「・・・・っはぁ・・・おはよう、悠。」

「・・・おはよう、冴子。」

「む。最近、悠の反応が面白くない。最初の頃は顔を真っ赤にしてあたふたしてたのに。」

「まぁ、毎日されれば耐性もつくよ。」

「それもそうだな。さぁ、もう朝だぞ。朝食ももう少しで出来るから早く起きるんだぞ。」

「了解。」

そう言って制服姿の冴子が部屋を出た。

・・・まぁ、あぁは言ったが、何回やっても慣れる訳がない。

当たり前だろう。付き合い始めてから三年間毎朝、高校に入って更に美人になった冴子がおはようのキスをしてくるんだぞ？

慣れろと言う方が無理な話だ。

まぁ、別に嫌じゃないからいいけども。いや、むしろ嬉しいから辞めさせる必要もないが。

制服に着替え下に下りると制服にエプロンを付けた冴子がテーブルに皿を置いていた。

「今丁度出来たところだから、座っててくれ。」

「おっす。」

俺は洗面所で手を洗い、席に着いた。

食卓に広がっているのは、正に日本食といった感じだった。

炊きたてご飯と焼き魚、煮物に漬物。
うん。いつも通り美味しそうだ。
そして、冴子もエプロンを外して席に着いた。

「「いただきます。」」

うん。見た目以上に美味しい。

「うん。やっぱり冴子の作るご飯は美味しいな。」

「ありがとう。そう言ってもらえると作った甲斐があるというものだ。」

そう言って嬉しそうに笑う冴子。
俺も釣られて笑ってしまった。
そこで浮かんできたのは、神が言っていた言葉。
アレは、どういう意味なのだろうか・・・・。

朝食を終え、カバンと冴子特製弁当、そして、神に貰った刀を収納袋にいれ、玄関に向かった。
玄関には既に冴子が準備万端な様子で立っていた。

「ん？何故その刀を持っているんだ？」

「あぁ・・・えーっと、何というか、神からのお告げ・・・・みたいな？」

「神というのは、前話していた事か？」

「あぁ。その人から『刀を常に持ち歩け。』って言われて。理由は教えてくれなかったけど、冗談を言っているような感じじゃなかったから一応持っていこうかと思ってさ。」

「ふむ。まぁそういう理由であれば持ってゆくのに反対しないが、教室までそれを持っていくわけにはいくまい？」

「あぁ。だから、悪いんだけど剣道部の部室に置かせてくれないか？」

剣道部の主将であり、先生からも人望の厚い冴子は先生から道場の鍵を預けられているのだ。

「わかった。」

「悪いな。」

「気にしなくていい。他ならぬ悠の頼みだからな。さて、そろそろ行こうか。」

「おう。」

いつものように他愛もない会話をしながら学校までの道のりを歩いていった。
しかし、俺の頭の片隅には常に神の言っていた言葉がグルグルと巡っていた。
同時に、今日が“日常”の終わりのような気がしていた。

学校に着いた俺たちは一回道場に行き、刀を部室に置いてから教室に向かった。
教室に入るといつものようにクラスメイト達の会話で賑わっていた。
クラスメイトと挨拶を交わし、席に着く。

これが、俺の“日常”だ。
何の違和感もない。

「（俺の考えすぎか・・・。）」

しかし、俺の中の不安は拭えなかった。

その不安は現実となってしまった。

時間は過ぎ、３時間目の授業中。
教科は英語。俺が一番苦手な授業だ。
俺は、眠くなり始めた目を空席になっている冴子の席に向けた。
全国大会の近い冴子は、その練習のため時々授業を休み個人練習する事が許されている。まぁそれだけ教師陣から実力があるということと、授業を休んでいても学力に支障がないほどの学力があると認められているってことだ。

「（早く終わらないかなぁ・・・・。）」

机にうつ伏せになりながらそう考えていると、急にスピーカーから放送が聞こえてきた。

『ガガガッッ・・・・全校生徒・職員に連絡します！！全校生徒・職員に連絡します！！現在、校内で暴力事件が発生中です。生徒は職員の誘導に従って、直ちに避難してください！！』

明らかに尋常じゃない雰囲気に俺は、身体を起こした。
同時に俺は昨夜の夜の神の声を思い出した。

―　気をつけろ。

その言葉が頭に浮かんだ瞬間、俺は反射的に教室から飛び出した。

「（とりあえず、冴子を探しにいくか。）」

練習中ということは冴子は道場にいるはずだ。そして、俺の刀もそこにある。
廊下を走りながらそう考えていると、再び放送が入った。

『繰り返します！！現在、校内で暴力事件が発生中dブッッ！！！・・・・・ギャアアアアアッッ！！助けてくれっ・・・止めてくれっ・・・ひいいいいいっ・・・・助けっ・・・・ひっ・・・・痛い痛い痛い痛い！！！助けてっ！！死ぬっ！！ぐわあああああぁぁぁぁぁぁっっ！！』

校内に静寂が訪れ、刹那校内に生徒達の叫び声が響いた。

誰もが我先にと逃げ惑い、他者を押しのけ出口に向かっていく。正に大パニック状態だ。

「これは、洒落にならないな・・・・。急ごう。」

更に加速し、俺は道場に向かった。

階段を駆け下りていくと、窓に目を向けると信じられない光景が広がっていた。

「・・・・人が・・・・人を喰っている・・・！？」

何人もの人が女子生徒の身体に噛み付き、その肉を貪っている。

同じ様な状況の人がグランドに散らばっていた。

そして、ついさっき喰われていた女子生徒がゆっくりと起き上がりフラフラと歩き出した。

「・・・・・・・。」

地獄絵図。

その言葉がピッタリな状況だった。

「どうなってんだ・・・・。」

目の前で起きている状況に動揺が隠せない。
そこで、俺は再び神が言っていた言葉が脳裏によぎった。

―　いいか。現実から目を背けるな。お前の目の前で起きている事は全て現実だ。それを忘れるな。

その言葉を思い出し、俺はその場で深呼吸をした。

「（これは、現実だ。それから目を背けるな。≪奴ら≫は人間を喰い、喰われた奴は≪奴ら≫になる。生きるためには≪奴ら≫を倒していかなければならない。これが今の現実なんだ・・・・。）」

そう胸に誓い、俺は再び走り出した。

一階にたどり着くと、廊下に体中を噛み千切られている人間がフラフラと歩きながら俺に向かってきた。
この廊下を抜ければ道場に着く。つまり、ここを通り抜けなければならない。

「・・・ってことは、コイツらをどうにかしないといけないって事か・・・・・。」

俺は階段に取り付けてあった手すりに手を伸ばし、そして、力いっぱいひっこ抜いた。
手すりを固定していた金具が鈍い音をたてながら外れ、ビスが吹き飛んだ。
手すりの長さは丁度神に貰った刀と同じくらいの長さだった。

「金具が錆びててよかった。じゃなかったら流石に俺でも壊せなかったからな・・・。」

そして、俺は近づいてくる≪奴ら≫をにらみ付ける。

「・・・・悪いが、そこを通らせてもらう。」

俺は一気に走り出し、手すりを横薙ぎに振った。

≪奴ら≫は抵抗することなく横に吹き飛び、壁に激突した。

しかし、少しするとまたゆっくりと起き上がった。

「・・・・身体じゃ効果なしか・・・・。ならっ！！」

俺は真正面にいる奴に狙いをつけ、跳躍。真っ直ぐに奴の頭を狙い振り下ろした。

鈍い音と肉片を飛び散らせながら奴は地面に叩きつけられた。さっきと違い奴は起き上がってこない。

「・・・・頭が弱点って事か。」

弱点がわかればこっちのものだ。

俺はそのまま正面に居る≪奴ら≫だけに目標を絞り、次々と蹴散らしながら道場に向かった。

「冴子っっ！！」

道場の扉を開け中に入ると、そこにはもう誰も居なかった。

「くそっ！！どこにいったんだ・・・。」

あるのは、数体の死体と血痕だけだった。

「・・・・無事で居てくれよ・・・。」

冴子の実力があれば、そう簡単にやられはしない。そうわかっていても不安は拭えなかった。

俺は、部室にある刀を持ち再び道場を飛び出した。

―Ａ　Ｈｅｌｌ　Ｏｎ　Ｅａｒｔｈ―（後書き）

随分と長い文章になってしまった・・・（　；　　。Д。）

さぁ、そんなこんなで遂に地獄が始まりました。
次回、いよいよ原作キャラが登場します。

では、また（＊　^ー。）ノ

―Ｓｕｒｖｉｖｅ―（前書き）

長らくお待たせいたしました＞＜；

今回は冴子と再会します。

そして、今回から語りサイドが冴子さんになります。

では、どうぞ（＝゜ω゜）ノ

―Survive―

―冴子side―

不可思議な放送が聞こえ道場の扉を開けると、外は地獄絵図だった。

辺りからは悲鳴と絶叫が響き渡り、目の前には体中を喰いちぎられた死人のようにフラフラと歩く生徒達がこちらに歩いてきた。

明らかに殺意を私に向けてくる彼ら。

私は今、目の前で起きている光景が理解できず、後ろに後ずさった。

すると、その彼らの背後で逃げ惑っていた女子生徒が教室の扉を突き破ってきた複数の男子生徒に捕まり、彼らに喰われていた。女子生徒は悲鳴よりも絶叫に近い叫びを上げながら暴れまわっていたが、次第にその声が小さくなりついに静かになった。

そして、女子生徒を喰っていた彼らは次の獲物を見つけるために立ち上がり、再びフラフラと歩き去っていった。

散々に廊下で喰い散らかされた女子生徒。しかし、その女子生徒はまもなくしてゆっくりと立ち上がり、さっきの彼らのようにフラフラと歩き出していた。

どうやら、彼らは人を喰い、喰われた者は彼らと同じになるということだ。

「・・・・・どうやら、これは彼らを倒さなければいけないようだな。」

私は、覚悟を決めて、木刀を構えた。
そして、近づいてくる彼らの胴を横払いした。
彼らは壁にぶつかり、ズルズルと床に落ちた。しかし、彼らはまたすぐに立ち上がってきた。

「・・・・身体じゃダメということか。ならばッ！！」

私はまだ立ち上がりかけていた彼らに向けて上段に構えていた木刀を頭に向けて一気に振り下ろした。
頭蓋が砕け、腐りかけていた肉が飛び散らせながら彼らは地面に倒れこみ、しばらくたっても動くことはなかった。

「・・・頭が弱点なわけだ。・・・・そして、扉くらいなら突き破れる程の力があるのか・・・。これは、捕まったら終わりということか。」

私は、木刀に付いた彼らの血を振り払った。ビシャッッと音を立てながら血が壁と窓に飛び散った。

「・・・・まず、悠を探さなくては。」

生き残ることよりも、死への恐怖よりも、まず最初に思い浮かんだ

のは『悠』のことだった。
その事実に自分がどれだけ悠を愛しているのかを再確認した私は、思わず笑みが零れた。

ガシャーンッッ！！

すると、近くから何かが壊れた音が聞こえた。

「・・・近いな。方向からすると保健室か？」

私は木刀を握り直し、音のする方に走り出した。

保健室に着くと私の予想通り、保健室の扉が砕け散っていた。
そして、保健室に入ると一人の男子生徒が喰われ、保健医の鞠川（まりかわ）校医が襲われていた。

私はまず、鞠川校医を襲っていた彼らを倒し、男子生徒を喰っていた彼らを倒した。
男子生徒はまだ意識はあるが身体を喰われ、既に手遅れな状態だった。

「・・・・私は剣道部主将、毒島冴子だ。二年生、君の名前は？」

「ゴホッ・・・石井・・・かず・・・ゴホッ」

「石井君。良く鞠川校医を守った。君の勇気は私が認めてやる・・・。」

序々に石井君の顔色が土気色に変わり始めていた。

「?まれた者がどうなるか知っているな?親や友だちにそんな姿を見せたいか?いやならば、これまで人を殺めたことはないが・・・・私が手伝ってやる。」

「お・・・・お願いします・・・・。」

石井君はカタカタと震えながらもゆっくりと笑みを浮かべた。
私は石井君の決意を聞き、木刀を構えた。

「え!?ちょっ・・ちょっと何を・・・」

すると、鞠川校医が私を止めようと近づいてきた。
しかし、私は鞠川校医に向けて手を突き出し、動きを止めた。

「校医といえど邪魔しないでもらいたい。男の誇り(プライド)を守ってやる事こそが、女たるの矜持(スタイル)なのだ。」

私は覚悟を決め、木刀を振り下ろした。
石井君の死に顔はとても安らかなものだった。

石井君を眠らせた後、私は薬品をカバンにしまう鞠川校医を守っていた。
次々に薬品をしまっている鞠川校医を横目に見ながら、私は石井君の亡骸を見つめていた。
今は白いシーツを身体にかぶせたため表情は見えないが、頭の部分が血で赤く染まっている。

「・・・・・・。」

ここに来るまでに何人かの生徒を殺めてきたが、あれは既に死人だ。
しかし石井君は“まだ”生きてきた。石井君も納得していたし、あのままにしていても彼らのようになり次は私を襲ってくるかもしれない。だから、あの行動は間違っていないと思う。

しかし、いくら今この状況が非現実的だとしても、“生者”を殺めたことには変わりない。
そのことに対しての罪悪感と未だに手に残る頭を割った感触が私の

心を沈ませていた。

「・・・・・・悠。」

無意識のうちに悠の名を呼んでしまった。
私が唯一心から信頼し、愛している彼。
その彼に私は、救済を求めてしまった。
例え私の罪が許されないものだとしても、彼に力強く抱き締め、あの優しい笑顔で「大丈夫だ。」と言われたい。
そうすれば、私はまた前に進むことが出来る。
あの時のように自らの罪とともに歩んでいくことができるのだ。

「・・・・・・悠。」

「冴子ッッ！！」

頭を上げるとそこには私が今、最も会いたい人が立っていた。
ずっと走っていたのだろう。
額に汗をかき、いつもでは考えられないくらい息が上がっていた。

「・・・・悠。」

「冴子、無事か？」

「・・・・あぁ。私は大丈夫だ。」

「そうか・・・よかった・・・・。」

悠は心底安心したような表情を浮かべた。
それだけで、悠がどれだけ私を案じてくれていたのかが伝わってきた。
その優しさを感じた瞬間、今まで耐えていた感情が湧き上がってくる。
そんな感情を必死に表情に出さないようにしながら、私は鞠川校医と挨拶を交わす悠を見つめた。

「・・・・どうした？」

その視線に気づいたのか、悠は振り返り私に近づいてきた。
しかし、感情を隠すのに必死で、何も言えなかった。

「彼女が私を助けてくれたのよ。それと“彼”も。」

「・・・・そうですか。」

悠は鞠川校医の視線を追ってシーツを掛けられた石井君の亡骸を見つめ呟いた。

「鞠川先生、薬品はもう大丈夫なんですか？」

「あ、そうだった。もうちょっと待ってね。もうすぐ終わるから。」

「わかりました。」

そう言って鞠川校医は再び薬品をバックに入れる作業を再開した。

「・・・・悠。私は・・・・・。」

「何も言うな。」

そう言って悠は突然私を抱き締めた。

「悠・・・何を・・・・。」

「大丈夫だ。冴子のやったことは間違っていない。」

「ッ！！」

いつものあの笑顔を浮かべながら。

「例え、みんながお前を責めたとしても、俺だけはお前の味方だ。」

悠はいつも私が今一番求めていた言葉をくれる。私が今一番求めていた笑顔をくれる。
もう我慢の限界だった。

「ゆ・・・う・・・。」

「大丈夫だ。今冴子を見ているのは俺だけだ。だから安心しろ。」

私は静かに悠の胸で涙を流した。

―Ｓｕｒｖｉｖｅ―（後書き）

う～む、進行速度が遅い気がします＞＜；
ごめんなさい、これが私の実力なんです；；；

今回少し原作には無いような、冴子さんの“弱さ”を表現してみました。
どんなに冴子さんが強くても、やはり女性なんです。
だから、弱気にもなったりするだろう。という勝手な考え方でやってみました。
苦手な人はすみません。

さて、次回はやっと原作メンバーと出会います。
ってこれ、前回も言った気がｇｇｇｇｇｇ（　；　　。Д。）
ってなわけで、では、また（＝　。ω　。）ノ

―Contact―（前書き）

今回はやっとやっとこさ主役メンバーに出会います＞＜；
何だろう、ココまで来るのが無駄に長くなってしまったような気がする・・・。

では、どうぞ（＝゜ω゜）ノ

―Contact―

――悠side――

「・・・・もう、大丈夫だ。」

暫く声を殺して泣いていた冴子は、そう小さく呟いた。

「・・・みっともない所を見せてしまったな。すまない。」

「気にするなって。それにみっともなくなんかない。幾ら強くても冴子は女なんだから、これが当然の反応だ。」

「ふふふ。私を女扱いしてくれるのは悠だけだよ。」

「当然だろ？俺はこんな可愛い女、他に見たことがないね。」

「ありがとう、うれしいよ。」

そう言って、冴子は微笑んだ。

どうやら、もう大丈夫なようだ。

「・・・・悠はいつも私が求めている言葉をくれるな。」

「当然だ。冴子が笑顔で居られるなら、俺は何だってする。」

「ありがとう。私も悠のためなら何だってしてみせる。」

そう言って冴子はまた優しく微笑んだ。
やっぱり冴子以上の女なんて見たことがない。
そう思うのと同時に俺は一つの決意を固めた。

「ありがとう。だから、ここでルールを一つ決めよう。」

「ルール？」

「ああ。」

そして、俺は冴子の手を握った。

「今、ここで“ナニカ”がおきている。多分、これから廊下や保健室いた“奴ら”と戦うことになると思う。かなりキツい戦いになるだろう。だけど、だからこそ、これからどんなピンチになったとしても、お互いがお互いのために犠牲になるようなことはしないようにしよう。」

俺の言葉に少し驚いた表情を浮かべた冴子。しかし、すぐにその表情は真剣なものに変わった。

「俺は冴子を死なせたくないし、ずっと冴子と一緒に居たい。だから、どんなときでもお互い助け合って生きていこう。約束だ。いいな？」

「勿論だ。私も悠を死なせたくないし、悠といつまでも一緒に居たい。私達はどんな時も一緒だ。」

そう言って冴子は俺を抱き締めた。
俺もそれに応えるように冴子を強く抱き締めた。

「・・・・あのー、もしもーし？」

「「っ！？」」

背後から聞こえてきた鞠川先生の声を聞いて、俺達は我に帰りすばやく離れた。
やばい、完全に先生のこと忘れてた。

「あ・・・あぁ。先生、薬の方はもう大丈夫なんですか？」

「えぇ。一応持ち出せる薬は全部持ったわ。」

その顔は面白いモノを見た子どもような顔をしていた。
くそっ、完璧に面白がられているっ。

「じゃ・・・じゃあ、そろそろ移動しましょうか。ここに長く留まっている意味もないですし。な、冴子？」

「う・・・うむ。そ・・・そうだな、そうしよう。」

「うふふ。二人とも無理しないで。顔、真っ赤よ？」

「「っ！！？？」」

うん。凄く恥ずかしい。

「若いっていいわねぇ～。」

「と・・・・とにかくっ！！また“奴ら”が来ないうちにここからでましょう。」

「そうね。でも、どこに行くの？」

「そうですね。とりあえず外に出ましょう。一旦ここがどんな状況になっているのか、把握しないと・・・・。」

キャアアアアアアアアアアアアアアッッッッ！！！！！

その時、何処からか女性の叫び声が聞こえてきた。

「悲鳴！？」

「近くだな。」

「俺が先に行くっ！！冴子は後ろと先生のカバーを頼むっ！！」

「心得た。」

そして、俺達は廊下に飛び出した。

案の定廊下にも何匹か“奴ら”がいた。

しかし、今こいつ等に構っている暇はない。
そして、俺は神から貰った刀を抜いた。

「ハァッ！！」

通りすぎ間際に“奴ら”の首を刈る。
流石は神から貰った刀だ。
切れ味も申し分ないし、何より刀がまるで羽を持っているかのように軽い。
俺はそのまま進行方向の“奴ら”を重点的に倒していった。

暫く、走ると近くから声と電動ドリルを回すような音が聞こえてきた。

「多分この先だ。気をつけろ。」

俺は冴子たちに声をかけ、そこから一気に加速し小さなホールに出た。

「くそぉっ、死ね死ね死ね死ね死ねぇぇぇ！！」

そこで見たのは女子生徒が、座り込みながらも襲ってきたであろう“元”男子教師に電動ドリルを突き刺し、大量の返り血を体中に受けている光景だった。

そして、周りにも数匹の“奴ら”がいた。

しかし、そこに居たのは“奴ら”だけではなかった。

近くには少し変わった釘打ち機を持った男子生徒が一人と、反対側の通路には金属バットを持った男子生徒とモップの棒を持った女子生徒がいた。

俺は瞬時に反対側の通路にいた男子生徒に目線を向けた。

男子生徒も俺の目線に気づき、短く頷いた。

「冴子！！」

「私は右の2匹をやる！！」

「麗！！」

「左を押さえるわ！！」

冴子と女子生徒は一気に飛び出し、“奴ら”に向かっていった。

俺と男子生徒はドリルの女子生徒と釘打ち機を持った男子生徒の側に迫っている“奴ら”に向かった。

冴子は一度に二匹を倒し、モップの棒を持った女子生徒も棒を槍のように扱い、問題なく“奴ら”を倒している。
金属バットの男子生徒も確実に“奴ら”の頭をつぶしていく。
俺も刀を横薙ぎに振り、正面に居た二匹の“奴ら”の首を一気に斬りおとし、横から襲ってきた“奴ら”を袈裟斬りを浴びせ、倒れたところで真上から頭に刀を突き刺した。

―Contact―（後書き）

やっと、原作メンバーに出会えました＞＜；
次は何処まで書けるんだろうか・・・（殴

では、また次回（＊　^ー　°）ノ

―Ｆｅａｒ―（前書き）

なかなか更新できずすみません＞＜
多分これからもこんな感じになると思いますので、どうかご容赦ください；；；

では、どうぞ（＝゜ω゜）ノ

―Fear―

ホールにいた“奴ら”を倒し、周りにも“奴ら”が居ないことを確認した俺は、小さく息を吐いた。

ふと横をみると電動ドリルを持っていたピンク色の髪をツインテールにした女の子が放心したように、周りを見ていた。

「高城(たかぎ)さんっ、大丈夫?」

「みやもとぉ・・・。」

そして、さっき一緒に戦ったモップの柄を持っていた女の子、宮本(みやもと)さんと鞠川先生が彼女の元に駆け寄っていく。

あれ・・・、俺この光景に見覚えがあるような気がする・・・。この高校に入学した時のような違和感が俺の頭に残る。

「鞠川校医は知っているな?私は毒島冴子。3年A組だ。」

すると、冴子が一歩前に出て自己紹介を始めた。

「・・・俺は、高瀬　悠。冴子と同じ3年A組だ。」

違和感に戸惑いながらも、俺も冴子に習い自己紹介をする。

「小室（こむろ）　孝（たかし）。2年B組。」

金属バット持った黒髪の男、小室君が少しぶっきらぼうに答える。

「去年、全国大会で優勝された毒島先輩ですよね！私、槍術部の宮（みや）本（もと）　麗（れい）です。」

ピンク色の髪の女の子、高城さんに駆け寄っていった女の子、宮本さんがこちらに振り向き、元気に答える。
やはり冴子の知名度は結構高いようだ。

「あ、えと、び、B組の平野（ひらの）　コータです。」

少し改造された釘打ち機を持つ小柄で小太りな男、平野君が噛みながらも自己紹介をする。
しかし、平野君の視線は俺の持つ刀に注がれている。

「・・・俺の刀がどうかしたか？」

「あ、い、いえ。何で刀なんて持ってるのかな？と思いまして。」

俺にその視線を気づかれた平野君は慌てて俯きながら小さな声で呟いた。

「これは、家の護神刀のようなものだ。別にどっかから盗ってきたわけじゃないからな？」

「じゃあなんでその護神刀がここにあるんですか？」

「それは・・・。」

そう言いながら、少し不信感を含んだ視線を俺に向ける平野君。
まぁ確かに最もな意見だな。
コイツらに神の話をしてもイカれた奴って思われるだけだし。
さて、どう誤魔化そうか・・・。

「悠には今日の放課後に剣道部でこの刀を使った演武を見せてもらう予定だったんだ。」

俺が、誤魔化し方を考えていると冴子が助け舟を出してくれた。
俺が冴子の方を向くと、冴子は微笑みながら小さく頷いた。

まったく・・・やっぱり冴子は最高だな・・・。

「演武？」

「刀を使った様々な型を披露することだ。」

「そうだったんですか・・・。」

冴子の言葉を聞いて平野君は少し安心したように呟いた。

「・・・でも、なんで高瀬先輩が演武をやるんですか？」

すると、今度は宮本さんから疑問が飛んできた。

「私が頼んだからだ。」

「毒島先輩が？」

「あぁ。そうだが、それがどうかしたか？」

「いえ・・・別に・・・。」

そういってチラッと俺の方を向く宮本さん。

「ただ・・・何で高瀬先輩なのかなって思いまして・・・・。」

「簡単なことだ。悠の方が私より実力があるからだ。自分より実力が上の者に教えを請うのは当然のことであろう？」

さも当然のように話す冴子。
てか、実力的には俺達は五分五分だろうが。

「あの毒島先輩より強いの！？」

驚きの表情を俺に向ける宮本さん。
まぁ、そういう反応になるわな。

「あの噂は本当だったんだ・・・。」

驚いた表情のまま、俯き小さく呟く宮本さん。
しかし、一つ気になる言葉があった。

「噂？俺の噂なんてもんがあるのか？」

「えっと・・・そのぉ・・・。」

俺が聞き返すと少しバツが悪そうな顔をする宮本さん。

「・・・文武両道、容姿端麗、頭脳明晰、完璧美人の毒島先輩といつも一緒に居る謎の存在。ってことです。」

すると、なかなか答えない宮本さんに代わって小室君が答えた。

「ちょっと、孝っ！！」

「他にも、毒島家に使える家臣とか、毒島先輩の執事とか、色々な噂がありますよ。」

宮本さんの制止を無視して尚も続ける小室君。
つか、俺そんな風に見られていたのか。

「家臣・・・ねぇ・・・。」

「たっただの噂ですよっ！！」

「いや、別に俺は怒ってはいないから。全然気にしてないし。」

必死に弁解する宮本さんに苦笑いがでてくる。

「いや、おかしいだろう。」

今度は別の所から異論が出てきた。

「普通いつも一緒にいるという事は恋人か夫婦と思われるのが当然であろう。それが何故家臣や執事などと思われるのだ？悠は私と将来を誓い合った仲だぞ。」

少し怒りながら反論する冴子。

「・・・・何サラッと恥ずかしい事言ってるんだよ・・・・。しかも、俺はそこまで強くもない。」

「私は別に恥ずかしくなんかないぞ？それに悠が私より強いのは事実だ。私が保証しよう。」

「ど、どうも。つか、そんなことで怒るなよ。」

「恋人が侮辱されたのだ。怒って当然であろう。」

「冴子の気持ちは嬉しいが・・・・。少し場所と状況を考えてくれ・・・・。」

「？」

「「「・・・・・・・・。」」」

ほら、宮本さんも小室君も平野君も呆然としているじゃないか・・・。

「・・・あの毒島先輩とあの謎の従者が、恋人同士・・・・・。」

「・・・校内最強の毒島先輩より強いっていうだけでも驚きなのに、加えて将来を誓い合った仲なんて・・・。」

「・・・毒島先輩を惚気させるなんて・・・・。」

「「「高瀬先輩って一体何者・・・？」」」

・・・・別にそんなに驚かなくったっていいじゃないか。
確かに、顔も普通だしビジュアルも普通だし、学力も普通だけどさ。
全然冴子と釣り合ってないけどさ・・・。

泣けてくる。

「・・・大分謎が多いけど、とりあえず高瀬先輩が毒島先輩より強いって事は何となくわかりました。」

そういって少し疲れたような表情をする小室君。

「・・・・よくわからないが、どうやらわかってくれたようだな。」

イマイチ状況が掴めていない冴子は首を少しかしげながらも、笑顔を浮かべた。

その笑顔を見て小室君と平野君の顔が少し赤くなり、俺もその笑顔を見てほんの少し癒された。

「なにさ、みんなデレデレして・・・・。」

すると、高城さんがフラフラと立ち上がりながら小さく呟いた。

「何言ってんだよ、高城。」

「バカにしないでよ！アタシは天才なんだから！」

いきなり怒り出す高城さん。

どうやら、さっきの衝撃で精神が少し不安定な状態になっているようだ。

無理も無い。女の子にとってあの惨状はキツすぎる。

「その気になったら、誰にも負けないのよ！！」

更に怒鳴り散らす高城さんを落ち着かせようと声を掛けようとしたが、それよりも先に冴子が動いた。

「もういい。充分だ。」

高城さんの肩に手を置き、優しく呟く。

その言葉に高城さんはだんだんおとなしくなり、ふと壁にかかっていた鏡に映る自分の姿を見ると次第に小刻みに震えだした。

「あ、ああ・・・・・・ああ。こんな汚しちゃった。ママにいってクリーニングにださないと・・・・・。」

振り返り、涙を我慢しながら冴子の制服にしがみつく高城さん。

「う・・・ううっ・・・。」

しかし、我慢しきれずにその目から大粒の涙があふれてくる。

「ああ・・・あああああ・・・・うわぁぁぁーんっ！！」

我慢していた反動か、大声で泣き叫ぶ高城さん。
そんな高城さんの頭に優しく手を置く冴子。

しばらく、高城さんは冴子の胸の中で泣き続けた。

―Ｆｅａｒ―（後書き）

長々と書いたけどあんまり進んでいないという事実（，；ω；、）ウッ…

でも、冴子さんの惚気が書けて作者的に満足ですｗｗｗ

次回は、チームを組むところまで書く予定です。

では、（＊｀▽｀）ノ～～　マタネー♪

―Ｔｅａｍ―（前書き）

長らくお待たせしてしまいすみません＞＜

やっとこさ、更新です；；；

では、どうぞ（＝゜ω゜）ノ

―Ｔｅａｍ―

数分後、大分高城さんが落ち着いたところで俺達はすぐそばの職員室に立てこもることにした。

部屋に“奴ら”が居ないことを確認し、すかさず鞠川先生が椅子に座り机にぐでーと伏せてしまった。

冴子も椅子に座り、宮本さんは近くにあった冷蔵庫の中から水を出し、みんなに水を配っていった。

うむ、出来た子だな。

そして、高城さんは給湯室の方に走っていった。多分顔を洗いにいったんだろう。

俺はみんなの行動を見ながら小室君と一緒にテーブルや椅子を使って、手早くバリケード作ることにした。

「皆、息があがっている。少し休んでいこう。」

丁度バリケードも作り終えたところで、冴子が提案すると、みんなもその意見に賛成し、鞠川先生を中心に集まってきた。

「鞠川先生、車のキィは？」

水を軽く飲んだ小室君が言った。

「あ、バックの中に・・・。」

「全員を乗せられる車なのか？」

「う〝っっ、コペンです・・・。」

コペンじゃ全員乗れないじゃないか・・・。

「部活遠征用のマイクロバスはどうだ？壁のカギ掛けにキィがあるが。」

「バスまだあります。」

「バスはいいけど、どこへ？」

「家族の無事を確かめます。近い順にみんなの家を回るかして必要なら家族も助けてそのあとは安全な場所を探して・・・。」

なかなかいい案だな。まぁ俺と冴子は関係ないか。両親居ないし・・・。

「見つかるはずよ。警察や自衛隊だって動いてるはずだから地震のときみたいに避難所とかが・・・どうしたの？」

高城さんが話を途中で止めてしまった。
その視線の先にはテレビをただ呆然と見つめる宮本さんがいた。
俺達もそのテレビに目を向けた。

ニュース番組か・・・・って。おいおい・・・。こりゃなんの冗談だよ・・・・。

「なんなのよ、これ・・・・」

「麗、どうした・・・！」

冴子が近くにあったチャンネルでテレビの音量を上げる。
テレビから聞こえるのはニュースキャスターが各地で起きている『暴動』に対する政府の対策についてのリポートだった。

「『暴動』ってなんだよ、『暴動』ってッ。」

冴子はすぐに他のチャンネルに切り替えた。

そこでは、その『暴動』現場からの中継映像だった。
その背後では、ストレッチャーに乗せられた遺体袋を運ぶ救急隊員が映っている。

『・・・・ません。すでに地域住民の被害は１０００名を超えたとの見方もあります。被害により非常事態宣言と災害出動要請は・・・。『パンッ』』

リポートの途中でどこからか発砲音が聞こえてきた。
その一発をきっかけに何発もの発砲音が続けて聞こえてくる。

『発砲です！ついに警察が発砲を開始しました！！状況はわかりませんが・・・』

そのリポーターが発砲音の方に向くと一瞬にして表情が凍りついく。
カメラもその目線を追い振り向く。
そこに映し出されたのは、遺体袋に入れられてた死体達が次々に動き出し人々を襲っている光景だった。

『きゃあああああ！！いやっ、なにっ、うそっ、たっ助けっ　うあっあああああああああっ！！』

そこで、映像は切れてしまった。

「それだけかよ・・・・どうしてそれだけなんだよ！！」

「パニックを恐れているのよ。」

小室君の激昂に高城さんが冷静に答える。

・・・・あぁ、なるほどな・・・。

「いまさら？」

「今さらだからだ。」

突然俺がしゃべりだしたことにみんなが驚き、俺の方に向いた。
高城さんは「わたしのセリフを取るな」ともいいたげな顔を向けている。

いいじゃないか、たまには俺にもしゃべらせてくれ。

「これ以上恐怖が増えると人々の混乱は増し、その混乱は秩序の崩壊に繋がる。もし、秩序が崩壊すればただでさえ対応が間に合っていないこの状況が更に悪化して、益々手が付けられなくなる。」

次第にみんなの表情がこわばっていく。
まぁ、無理も無いか。状況が状況だからな。

「でっでも、どこかには安全な場所が・・・・。」

「いや、恐らくないだろう。」

「え？」

「これは、パンデミックだ。」

「パンデミック？」

「『感染爆発』。つまり世界中で同じ病気が大流行しているということだ。昔で言うとスペイン風邪や黒死病、今で言うなら鳥インフルエンザが有名だな。」

「どうやってその流行が終わったんですか？」

「大抵は人間が死にすぎると拡大は止まる。感染対象がいなくなるからな。だが、“奴ら”は死んでも蘇る。つまり、拡大を止める手段は無い・・・・。」

辺りが重苦しい空気につつまれる。
だが、これが事実だ。この事実を受け止めなくちゃ『これから』を生きていくことは出来ない。

「そうなれば、まず家族の無事を確認した後、どこに逃げ込むかが重要だな。ともかく、好き勝手に動いていては生き残れまい。チームだ。チームを組むのだ。生き残りも拾っていこう。」

重苦しい空気を吹き飛ばすように、冴子がハッキリとした口調で言い放つ。

「そうしよう。駐車場は正面玄関からが一番近い。そっからいくぞ。みんなそれぞれ準備してくれ。」

みんな暗い顔をしながらも準備を始めた。

「しかし、悠。」

「ん？」

すると、冴子が微笑みながら俺の横に来た。

「この状況であれだけ冷静な判断が出来るとは、見直したぞ。」

「おいおい。俺だってやるときゃやるっての。」

「ふふっ。そうだな。しかし、よくパンデミックや昔の病気のことなんて知ってたな。」

「まぁ・・・・・・・な・・・・・・？」

あれ？言われてみれば、何で俺そんなこと知ってるんだ？
自慢じゃないが俺はそんな頭いいほうじゃないぞ？

どこかで教えてもらった？・・・・・違う。知っていたんだ。

俺は“奴ら”という存在を、今までの展開を、この状況そのものを、・・・いや、この『世界』を・・・。

じゃあ俺は何故それを、知っている？

前に視た事があるからだ・・・。

前。つまり前世で。

そこで読んでいたマンガの世界にそっくりだった。

そうか。ここは【学園黙示録　ＨＩＧＨＳＣＨＯＯＬ　ＯＦ　ＴＨＥ　ＤＥＡＤ】の世界なのか・・・・。

信じられないようなこの状況に思考がついていかない。

転生という摩訶不思議を体験したが、まさか自分がマンガの世界に来るなんてファンタジーな展開は全くもって予想外だった。

同時に俺が今まで過ごしてきた時が全て空虚（ニセモノ）になっていくような、絶望感が俺を包んでいく。

「おい、悠。どうしたんだ、顔が青いぞ？」

「冴・・・・子・・・・。」

スッと冴子の声が頭の中に響いていく。

それだけで、ゴチャゴチャになっていた思考がクリアになっていく。

そうか・・・。たとえ、この世界がマンガの世界だろうとなんであろうと、俺のやることは変わりない。
全く、俺は何を悩んでいたのか。

俺は無言で冴子の引き寄せ、抱きしめた。

「ゆっ悠っ！？いっいきなりどうしたんだ！？」

突然の俺の行動に顔を紅くする冴子。

俺のやること、いや、やるべきこと。

それは・・・。

「お前は、俺が守る・・・。」

ただ、それだけのことだ。

―Ｔｅａｍ―（後書き）

・・・・アレだけ待たせてしまったのにも関らず、これしか進んでいないとは・・・。

ごめんなさい；；

次回はもっと早く更新できるように頑張ります（、・ω・´）

―Preparedness―（前書き）

大っっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっ変長い間お待たせしてしまって、申し訳ありません（土下座

資格試験やら仕事の忙しさやら体調不良やらで全く持って更新できませんでしたが、やっと落ち着いてきたのでおよそ４ヶ月ぶりの更新です。

本当にすみませんでした。。。。。。

では、どうぞ。

―Preparedness―

「な、、、なぁ悠？私としては悠に抱きしめられる事はとても喜ばしいことなのだが、些か時と場所というものをだなぁ、、、、皆も見ているし。いやいや、決して嫌というわけではなくてだなっ！寧ろ幸せ全開で何時までもこのまま抱きしめてくれても全く構わないのだが。だが、タイミングというか、何というか・・・・。」

俺の胸で顔を紅くし、ワタワタと慌てた様子でしゃべる冴子。
そんな普段では考えられないような珍しい光景に職員室を出かけていた小室君たちは驚きの表情を浮かべ、鞠川先生はニヤニヤと笑っていた。

「冴子・・・・。」

「・・・私としては出来ればもっと情熱的にこぉ絡みつくような・・・。」

マイワールド絶賛爆走中の冴子はブツブツととんでもないことを呟いていた。
全く、聞いてるこっちが恥ずかしk・・・・いや、何故だろう全然恥ずかしくないのだが・・・・。
まぁ、そんなことは置いておいてさっさと冴子の目を覚まさなければ。

「・・・そんな・・・ダメだ、こんなところで・・・。みんな見てるじゃないか・・・。だが、まぁ、もし、悠が望むのであれば私も吝かでもないｚ「冴子？」あ、な・・・どうした、悠？」

やっと戻ってきた冴子。
もう少し戻ってくるのが遅かったら更に恥ずかしい展開にｎ・・・・
いや、何故だろう全然恥ずかしくｎ（ｒｙ

「そろそろいくぞ？」

「あ、あぁ。そうだな。」

顔を紅くしながらも、冴子は俺と一緒に職員室を出た。

「・・・・ずいぶんと余裕なんですね、先・輩？」

すると、高城さんがこめかみをヒクつかせながら一段と低い声で迫ってきた。

「ん？まぁ、ずっと緊張してるより少しくらいリラックスしてるほうがうまくいくこともあると思うぜ？」

「だからって、人前で惚気ていい理由にはならないと思うますがねぇ。」

「気にするな。さ、早く行こうぜ。」

「誰のせいで遅れてると思ってんのよ・・・・。」

後ろでブツブツ言っている高城さんはほっといて、俺は一度深呼吸をしてで気持ちを落ち着かせた。
さっきはああ言ったが、現実はそう甘くない。
ここから先は、一瞬でも気を抜けば待っているのは【死】ただ一つ。

「わかっているとは思うが、こっから先は一瞬の油断が命取りだ。常に周囲に気を配り、出来るだけ静かに行動しよう。」

「≪奴ら≫の弱点は頭よ。いくら胴体を攻撃しても意味はないわ。」

「しかし、極力戦闘は避けたほうがいい。すべての≪奴ら≫に対応すれば、それは足止めされているのと同じだ。取り囲まれてしまう。それに、≪奴ら≫の腕力は信じられないほど強い。一度つかまれたら逃げるのは難しい。」

「鞠川先生と高城さん、宮本さんを中心に、先頭は俺。両サイドを冴子と小室君。後衛に平野君。宮本さんは鞠川先生達の警護。この布陣で行こう。」

みんなが静かに頷くのをみた俺は、右手に握られている刀を見た。

「（そういえばコイツの銘（なまえ）、まだ考えてなかったな。）」

神からもらった【冴子を護りたいと思う限り絶対に折れない】という名も無き刀。
その曇りの全く無い刀身は、外の光を反射して光輝いていた。

「（銘はあとで考えるか・・・・さて、頼んだぞ、相棒。俺の命、お前に預けた。）」

そう心の中で呟くと刀はそれに答えるかのように輝きを増した。

「・・・・行くぞ。」

そして、俺達は歩き出した。
この地獄からの脱出を目指して・・・・。

―Preparedness―（後書き）

久々すぎて、キャラがおかしくなってそうでものっそい心配です（；゜Д゜）

次回は学園脱出まで書きたいと思います。
今度は早めに更新できるように頑張ります（、へ、；）

―Escape―（前書き）

今回は学園脱出までとなります。

では、どうぞ（＝゜ω゜）ノ

―Escape―

―冴子side―

私たちは悠の後に続き、迅速に正面玄関へと向かっていた。

その道筋には何体かの≪奴ら≫がいたが、先頭を歩く悠が全て適当にあしらったり頭をつぶしてしまったため、当然私たちへの被害はゼロ。それどころか未だに一度も武器を振るってすらいない。

全く。

本当に頼りになる奴だよ、お前は。

「キャァァァッッ！！」

すると、すぐ先にある階段の方から悲鳴が聞こえてきた。

「冴子ッッ！！」

直後先頭を歩いていた悠は私の名前を呼びながら、一瞬だけ私に目を向けた後、階段へと駆けていく。

たった一言だけだが、私には悠の意志が手に取るようにわかる。

「任せろッッ！！」

だから、私も一言で答える。

私たちには、それで十分なのだ。

階段に到着した悠はすぐさま刀を上段に構えながら下へと飛び込んでいった。

私たちも急いで悠の後を追い、階段に到着した頃にはもう全てが終わっていた。

階段の踊り場には軽く息を吐きながら刀に付いた血を払う悠と、バットや猿股を待ちながら呆然と悠を見つめる４人の男女。そして、首を撥ねられた数体の≪奴ら≫の亡骸のみ。

「あ、ありが「大きな声を出すなよ？≪奴ら≫に気づかれるからな。」」

「≪奴ら≫に噛まれた奴はいるか？」

「い、いません。いません！！」

「・・・・大丈夫みたいだな。」

どうやら、少し落ち着いたみたいだな。

「悠。」

「冴子。」

私が呼びかけると悠は真剣な表情を少し和らげ微笑みを向けてきた。
たったそれだけなのに、私の心は安心感でいっぱいになる。

「大丈夫か？」

「問題ない。皆(みな)無事だし、後方から≪奴ら≫も来ていないよ。」

そう。さっきの一言には自分が居ない間、皆を護ること。そして、
先ほどの悲鳴を聞いてやってくるであろう≪奴ら≫への警戒という
意味が込められていたのだ。
まぁこの程度の事など、私たちにとっては造作も無いことだ。

「流石、冴子。完璧だな。」

「当たり前だ。何年一緒にいると思っている。」

「ははっ、確かにな。」

そう言って再び微笑を浮かべる悠。
そして私もその微笑につられるように笑っていた。
こんな状況下でも、しっかりと心が通じ合っていると再認識できたことがとても嬉しかった。

「さてと。」

数秒微笑あっていると悠は笑顔から真面目な顔に変え、後ろにいる男女に顔を向けた。

「俺達は、これからバスに乗ってここから脱出するつもりだ。君達も一緒に来るか？」

「え、えぇ！」

半ば反射的に護られていた女子の内の一人が答え、その声に続くように残る男女も頷いた。

「・・・決まりだな。よし、行くぞ。」

そして、再び私たちは正面玄関へと向かっていく。

―悠ｓｉｄｅ―

助けた生き残りを連れながら静かに階段を下って行った俺達。
ここを下れば正面玄関へと出られる。

のだが。
俺の記憶が正しければ確かこの先には・・・・。
そう思い、踊り場から正面玄関を眺めると。

「・・・・やっぱりか。」

案の定、そこには数十体の≪奴ら≫が唸りながら彷徨っていた。
しかし、運よく手前側の下駄箱の陰には≪奴ら≫がいなかった。
俺達は細心の注意を払いながら≪奴ら≫の居ない下駄箱の陰まで降りていった。

「ふぅ・・・。」

何とかみんな無事に移動を終えることができた。

「みんな、気を抜くなよ。武器を持っている奴は音を立てないように慎重に行動しつつ、周囲の警戒を怠るな。」

みんなが静かに頷くのを確認した俺は、下駄箱の陰から辺りを見渡した。

近くにはいないが、やはりそこら中に≪奴ら≫がいた。

玄関のドア付近にも周りよりかは少ないものの何体かの≪奴ら≫が陣取っていた。

さて、どうしたものか。

「やたらといやがる。」

すると、俺の横から辺りを見回した小室君が静かに呟いた。

「見えていないから隠れる事なんて無いのに。」

不満そうな表情を浮かべる高城さん。
まぁ、確かにその通りなんだが・・・。

「じゃあ高城が証明してくれよ。」

そう言いながら小室君が苦笑いを浮かべると、高城さんはビクッと肩を震わせ何度も首を振った。

ま、そうだろうな。

俺は多少原作の知識があるから確信を持てるが、みんなは違う。
合っているかもわからない不確定要素に命を掛けることは出来ないというわけだ。

だが、しかし。

「たとえ高木君の説が正しいとしても、この人数では静かに進むことなどできん。」

「だが、校舎の中を進み続けても・・・・襲われた時、身動きがとれない。」

「つまり、玄関を突き抜けるしかないのね。」

その通り。

つまり・・・・。

「誰かが・・・・確かめるしかあるまい。」

目の前に広がる≪奴ら≫の大群の中を進むために、その不確定要素を確定要素だと証明する必要があるわけだ。

みんなの間に流れる重い沈黙。

当然だろう。

あっているかもわからない事を証明するために、自ら≪奴ら《死》≫に突っ込むわけだからな。

そんなのをする奴は、相当な自殺志願者か頭ん中がハッピーな奴(バカ)ぐらいだろう。

・・・・・まぁ、この問答が始まる前からこうなることはわかってたんだけどな。

「・・・・・よし、僕がいk「いや、俺が行く。」

必死に勇気を振り絞った小室君には悪いがここは俺が行くべきなんだ。
俺は既に結果を知っているから、みんな程の不安はない。
それに不測の事態が起きたとしても、みんなよりは生存する可能性が高いだろうしな。

「そんなっ！！俺だって・・・！！「いや、小室君には悪いが、私も悠を推すよ。」なっ！？」

まさか、冴子が肯定してくれるとは。

「毒島先輩！？」

「この中で一番の実力者は間違いなく悠だ。それは、私が誰よりも知っている。それに、悠なら例え不測の事態が起きたとしも生存する可能性がこの中で一番高いからな。」

おいおい、あまりハードルあげるなよ。
まぁでも。少し予想外だったが、冴子の意見ならみんなも聞くだろう。

「悠・・・。」

そこで、平野君と一緒に最後尾にいた冴子はゆっくりと俺に向かってきた。
見ていた訳じゃないが、気配でわかる。
そして、その気配は俺の横で止まる。

「・・・どうした？」

俺が冴子の方に身体を向けると同時に胸に軽い衝撃を受けた。

「・・・・・心配するなって。絶対にお前を一人になんかしないから。さっきも約束したろ？」

そして、なるべく優しく、俺の胸にしがみつく冴子の頭を右手で撫でながら、残った左手で抱きしめた。

全く、泣くほど不安なら最初から推すなっての。
まぁ、客観的に見れば冴子の判断は何一つ間違っていない。
一番生き残る可能性が高い人物がやるのは当然だ。適材適所ってやつだな。

だが、その事実を理解はしているが、納得はしていないって感じか。

「・・・・未亡人は、嫌だからな？」

「勿論だって。俺のせいで冴子が不幸になるなんて、死んでも死に切れないっての。」

てか、独り身って。
俺達まだ《・・》結婚してないだろうが。
気が早いって。

「・・・・んじゃま、いってくるわ。みんなのこと、頼むぜ？」

「・・・・あぁ、任せろ。・・・・気をつけてな。」

「おう。」

さて、いっちょやってやるか。

俺は、ゆっくりと下駄箱の陰から出た。

目の前には何体もの≪奴ら≫がのらりくらりとまるで獲物を探すかのごとく歩き回っている。

くそ。いくら原作の知識があるからといって、こう目の前にするとやっぱ怖ぇなこりゃ。つか、その知識も読んだのずいぶん前だから、ずいぶんあやふやだから余計に怖ぇ。

心臓が周りに聞こえるのではないかと思ってしまうくらいに高鳴っていくなか、俺はゆっくりと前に歩き始めた。

すると、その直後、下駄箱の死角から一体俺の目の前にやってきた。背後で、みんなが息を飲む気配がした。瞬間的に息を止め、全身から嫌な汗が噴き出し、自然に刀を握る手に力が入る。

しかし、俺の1メートル前を通ったにもかかわらず、ソイツはこっちに全く気づく様子もなく俺の前を通り過ぎていった。

今度はみんなの安堵の気配を感じながら、俺は静かに肺にたまった空気を吐き出した。
どうやら、成功のようだ。

そう確信した俺は、そのまま出入り口の扉を静かに開け、後ろにいる冴子に合図を出す。
冴子は、一度小さく頷きみんなに合図を出した。

それを見た俺は落ちてあった血にまみれた上靴を拾い、一番出入り口から遠い下駄箱に向けブン投げた。

上靴は盛大な音を立て下駄箱にぶつかり、その音に反応した≪奴ら≫がゾロゾロとそっちに向かっていった。

今のうちに、ってことで、みんなは少しペースを上げ出口に向かっていった。

よし、どうやらうまくいきそうだな。

・・・・・・・・・・・・・・・・・ん？

その光景を見ていると、俺の記憶に何かが引っかかった。
何だ、この違和感は。
何かが引っかかる。

確か、この後何かあったようなそんな気がする。
なんだったかな・・・・。

その答えは、すぐにやってきた。

ガキィィィィィィィィィィィンッッ！！！！！！！

「「「「「「「「「「ッッ！！！！！！！」」」」」」」」」」

一番最後尾を走ってきた少年が持っていた猿股がドアの柱にぶつかり、甲高い音が響き渡った。

そう、それも、外にまで響くような《・・・・・・・・・・》大きな音が。

「走れッッ！！」

反射的に俺は大声を上げた。

そんな声を出したら、《奴ら》の的になるのは目に見えている。

だが、今更もう遅い。

既に、玄関にいた《奴ら》はこっちに迫り、外にいた《奴ら》もこっちの存在に気づいてしまっていた。

高城さんと小室君たちが後ろで何か叫んでいるが、今はそれどころではない。

「冴子ッッ！！」

「任せろッッ！」

俺が呼んだ時には、既に冴子は俺の隣で木刀を構えていた。

「俺と冴子で突破口を開くッ！！みんなバスまで全力で走れッ！！」

同時に俺と冴子は走り出し、行く手をふさぐ≪奴ら≫をつぶしていく。

冴子が相手の体制を崩し、俺が一撃で仕留める。

俺が冴子の横から迫る≪奴ら≫を斬り払い、冴子が俺の死角をカバーする。

そんな阿吽の呼吸のもに俺達は前へと進み、バスにたどり着いた。

小室君が鞠川先生からキィを受け取りドアを開け、鞠川先生は再び小室君からキィを受け取り運転席に座った。

「あー、私の車と違うッ、えーとＡＢＣ、ＡＢＣ・・・・。」

・・・・何かものすごく頼りない声が聞こえたような気がしたが、とりあえず無視だ。

武器を持ってない生徒を優先的に乗せていき、俺達と小室君が外で、平野君が車内の窓からの援護を受けながら何とか場を持たせていた。

何人か少ないな・・・・。どうやら、やられた見たいだな。

しかし、今は感傷に浸っている場合ではない。

「悠ッッ！！全員乗ったッッ」

「冴子ッ、お前から乗れッッ！！」

最後に回りにいた≪奴ら≫を一気に斬り払ってから、冴子に続きバスに乗り込もうとした。

その時である。

「・・・・・・・くれぇっ！！」

背後から誰かの声が聞こえてきた。

振り返ってみると、数名の生徒と黒いスーツを着た男がこっちに向かって走ってきていた。

確かアイツは・・・・。

「3年A組の紫藤だな。」

そうだ。確か政治家だかの息子だかで、俺の一番嫌いな奴だ。
それに、原作でも最低野郎だったはず。
あ、今アイツ一人の生徒を蹴り飛ばしやがった。あの野郎ぉ・・・・・。

「・・・・紫藤。」

『紫藤』という言葉に反応を示す宮本さん。
まぁ、その反応も最もだろうな。

「もう出せるわよ!!」

辛抱たまらないように鞠川先生が叫ぶ。

「もう少し待ってください!!」

「前にも来てる!!集まりすぎると動かせなくなる!!」

確かに、余り集まりすぎるとこっちが横転するからな。ちゃっちゃと行きたいが仕方ないか・・・・。

「俺が前の≪奴ら≫を片付けるッッ！！アイツ等が乗ったらそのまま出せっっ！！飛び乗る！！」

「なッ！？おい！！悠！！」

冴子が叫んでいるが、悪いが無視。

紫藤はどうでもいいが、アイツのせいで冴子やみんなが危険になるのは我慢ならん。

俺はバスから飛び降り、前にいる≪奴ら≫を掃除していく。

正面の奴を縦に斬り裂き、横から迫る奴の額に突きを放つ。

そのまま振り上げ、頭蓋と頭を切り裂きながら逆にいた奴を真っ二つ。

そうやって、≪奴ら≫の数を減らしていった。

「悠ッッ！！」

十数体ほど斬り捨て、そろそろキツイかなぁ・・・・と感じてた時、背後から冴子の声とバスのエンジン音が聞こえてきた。

振り向くと、死体を踏み潰しながら迫るバスの乗り入れ口から冴子が身を乗り出し俺に向けて手を伸ばしていた。

「ナイスタイミングだ。」

それを見た俺は、最後に前方にいた四体の≪奴ら≫斬り払い、すぐ横を通り過ぎるバスを横目に冴子に手を握りながらバスへと飛び乗った。

こうして、俺達は学園を脱出した。

―Ｅｓｃａｐｅ―（後書き）

なんかちょっと長いような気もしますが、気にしないでください。
いや、寧ろこれが普通なのか・・・？

では、また（＝ ゜ω ゜）ノ

´１１／１０／１６
オリジナル小説をうｐしました。
以前違うサイトで載せていたやつをリメイクしたやつです。
もし、お暇があれば見てやってください＾＾

―unite―（前書き）

再び、長い期間をあけてしまいました＞＜

最近、ヒマな時間が少ない且つネタが浮かばずここまで遅れてしまいました。

誠に申し訳ありません。

ですが、少しずつですが書いていきますので、どうか長い目で見てやってください。

―unite―

「ふぅ・・・。何とか間に合っっと!?」

バスに乗り込み一息ついた時、手を握っていた冴子が俺の胸に飛び込んできた。

「冴子?」

ゆっくりと冴子の両肩に手をのせると、その身体はカタカタと小さく震えていた。

「・・・・あまり心配させないでくれ。私にはもう悠しかいないんだ・・・・。」

胸に顔を埋めているため表情は見れなかったが、その声は少し震えていた。

「・・・ごめんな。」

俺は、そんな弱々しい冴子の身体を謝罪の意をこめて、優しく抱きしめた。

「・・・・・見せ付けてくれるわね。」

その光景を近くで見ていた高城さんは冷ややかな目で俺達を見つめていた。

悪いな。だが、止める気は無いんだなこれが。

しばらくして、落ち着いたのか冴子はゆっくりと俺から離れていき、――その時の冴子が見せた恥ずかしそうな表情は俺の脳内フォルダに永久保存した。――近くの座席に二人並んで座った。

何とか無事に学園を脱出することは出来た。しかし、本当の地獄はこれからだ。俺の朧げな原作知識もそこまで役に立たないし、何より目の前に迫るリアルゾンビに立ち向かうのは相当に神経を使う。

何しろ≪奴ら≫は頭以外を幾ら攻撃しようが関係ないが、こっちは噛み傷一つ、あまつさえかすり傷一つでも負えばそこでゲームオーバー。晴れて≪奴ら≫の仲間入りだ。

そんな恐怖と戦うことなどただの高校生が出来るはずもない。

これから俺達はみんなで一緒に生きていくためにどうすればいいのか。

「だからよぉっ、このまま進んだって危険なだけだってば！！」

そんな感じで今後の方針を考えてた矢先に、後部座席に座っていたいかにも不良っぽいやつが喚いていた。

「だいたいよぉ！！何で俺らまで小室たちに付き合わなけりゃいけないんだ？お前ら勝手に街に戻るって決めただけじゃんか。寮とか学校の中で安全な所を探せばよかったんじゃないのか！？」

その不良の声にちらほらと賛同する声も多数。

「もういい加減にしてよ！こんなんじゃ運転なんか出来ない！」

次第のヒートアップしていく文句の嵐に遂に鞠川先生は車を止め大声をあげた。

・・・・・・。よし、ここは大人な対応で事を進めよう。

「本気で言ってるのか？」

「あ゛！？」

「本気で、言っているのか？って聞いたんだ。」

「文句あんのか！？あ゛！？」

「当然だ。お前は本気で、あの学校の中に安全な場所があると思っているのか？何体もの≪奴ら≫が蔓延るあの場所に。」

「そっ・・・そんなもん探してみねぇとわかんねぇだろうが！？」

「確かにその通りだ。だが、お前の言う【安全な場所】とやらを探すためには≪奴ら≫の集団の中をこの大人数で探し回らなくちゃいけない。その間に誰も死なずに居られるのか？武器も不十分なこの状況で。そんなの俺は御免だな。だから俺達はあそこから脱出することを選んだ。それに勝手についてきたのはお前達だろう。にもかかわらずお前らはお前らがバスに辿り着く間必死に戦い時間を稼いだみんなに礼の一つも無く馬鹿みてぇな文句をダラダラ吐きやがる。そんなに文句があんなら今すぐこのバスから降りればいいじゃねぇか。ま、文句しか吐けねぇようなテメェらにそんな度胸があるとは思えんがな。」

「んだと、テメェ！？」

キレたそいつは俺に真っ直ぐ殴りかかってきた。
俺はその遅すぎるパンチを難なくいなし、合気の要領でそいつを床にたたきつけた。
受身も取れずに、呻くそいつの顔面に俺は刀の切っ先を突きつける。

「文句を言う暇があんなら、みんなで生き残る術（すべ）でも考えやがれ。

話はそれからだ。」

ふぅ・・・。スッキリした。
途中から大人な対応とはかけ離れた対応をしてしまったが、まぁ気にしない。
それにこんだけ言えば、他のやつらも静かになるだろう。結果オーライ。

そして、俺の記憶が正しければこの後に・・・。

パチパチパチ

案の定、その不良の後ろから誰かの拍手が聞こえてきた。

「実にお見事！」

拍手の主、紫藤。

「しかし、こうして争いが起こる理由。それは、我々にはリーダーがいないからです。」

「で、候補者は一人きりってわけ？」

「私は教師ですよ高城さん。そして、皆さんは学生です。それだけ

でも死角の有無ははっきりしています。」

こんな状況で学生も教師も無いだろうが。予想通り面倒くさいやつだ。

「おや？何か不満があるのですか、高瀬　悠君？」

すると、俺の非難の視線に気づいたのか紫藤は俺に胡散臭い笑顔を向けてきた。

「いえ、別に。ただ、何バカなこと言ってんだろうなぁと思っただけです。」

「バカなこと・・・ですって？どういう意味か説明してもらえますか？」

「これは俺の持論だが、組織のリーダーってのは誰かが立候補するんじゃなく、自然にみんながそいつについていく。そんな奴がリーダーにふさわしいと思っている。」

「素晴らしい考えです。しかしそれはあくまで君の持論であり、一人の勝手な行動は組織の規律を乱すことになります。」

「確かにその通りだ。だがな、俺は助けを求める生徒を足蹴にして自分だけ生き残るような“教師様”には付いていけないって言ってんだよ。」

「なっ！？」

今までの人を見下すような表情から一変して焦りの表情を浮かべる紫藤。

俺の話を聞いて、後部座席にいた連中から戸惑いの声が聞こえてくる。

「な・・・何の証拠があってそんなでまかせを・・・。」

「確かに当の本人は既に≪奴ら≫の仲間入りしてるし、見たのは俺だけだから何の証明にもならない。だから、お前達は勝手に集まって行動すればいい。そして、俺はそこには参加しない。ただそれだけの話だ。せいぜい生き残れるように頑張るんだな“りーだーさん”。」

「くっ・・・！？」

悔しそうに顔を歪める紫藤。

いい気味だ。

「悠。」

「ん？どうした？」

「随分と饒舌じゃないか。どうかしたのか？」

「ヒドいな。俺だって言うときは言うんだぜ？」

「ははははっ。そう拗ねるな。私はただ悠のカッコイイ姿が見れて嬉しかっただけだよ。」

「くっ！！そんな事言われたら怒るに怒れないじゃないか。」

「ははははっ。」

そして、二人は静かに笑いあった。
あー、やっぱり冴子と一緒にいるのが一番落ち着くわぁ。

「ヒマさえあれば惚気るの止めてもらえますか？先輩？」

すると、そんな幸せ全開の俺達の横の席に座っていた高城さんが冷たい視線を送ってきた。

「ん？何だ、うらやましいのか？」

「違うわよっっ！！そうじゃなくて、さっきの話の続きよ。」

「さっきの話？」

「紫藤と話してた話よ。私も先輩と同意見よ。私もその現場見てたしね。だから私はアナタ達と一緒に行動したい。」

「私も、先輩達と一緒に行きたいです。アイツと一緒にいるくらいなら死んだほうがマシよ。」

「ぼっ僕も」

「僕も付いていきます。」

「私も行きたいなぁ～。」

高城さんも、宮本さん、平野君、小室君、鞠川先生も同意見らしい。

「どうするのだ、悠？」

そう言ってニコニコ顔で俺の顔を覗く冴子。
冴子のやつ、俺の考え分かってるくせにわざと聞いてきたがった。

「どうするも何も、拒む理由なんてあるわけないだろう？」

こうして、俺達はこの地獄のような世界を生き残るための真のチームになった。

―unite―（後書き）

小室チーム改め、高瀬チームの誕生でした。

次回は、悠君の実力があらわになる予定です。

では、また次回（＝ 。ω 。）ノ

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n4704p/

学園黙示録 HIGHSCHOOL OF THE DEAD -全てはキミを護るため-

2012年1月4日14時47分発行